

2009年度2学期木曜1時限「認識するとはどういうことか？」
第9回講義（2009年12月3日）

Was bisher geschah.

3、心身問題における中心問題：「機能主義はただしいのか？」
心ないし意識内容は、多くの場合、次の二種類に分けられる。
一つはクオリアであり、もう一つは、志向性である。

(1) クオリア

唯物論者は、心その機能を還元して理解する。
その機能主義からの帰結として、同一説、消去主義の二つの立場があることをみた。
しかし、機能主義ではクオリアを説明できないこと示す幾つかの思考実験を紹介した。

(2) 志向性 をどう説明するのか？

■志向性とはなにか。(サール『心の哲学』山本貴光、吉川浩満訳、朝日出版社より)

志向状態とは、

認知（知覚、記憶、信念）

意思決定（行為中の意図、事前の意図、欲望）

志向性とは、このような状態の心の性質である。

志向状態には、自らを超えて世界の中の対象と事態を指し示す能力がある。

志向状態が、命題を内容とするわけではない。志向状態は単に対象を指示するだけかもしれない。たとえば、マリリンを愛する、と言う場合。S (n)

■intentionality(志向性)と intensionality の区別

志向性は、世界の中の対象と事態へと方向付けられ、関与し、その一部となる。

intensionality (内包性) とは、外延性 (extensionality) に対立するもので、

§ 9 科学哲学 (実証主義からパラダイム論へ)

1、実証主義の科学観

(1) カルナップ(1891-1954)の論理実証主義 logical positivism

<参考文献>

- 1、カルナップ「科学の統一の論理的基礎づけ」(1938)
『カルナップ哲学論集』紀伊国屋書店
- 2、ポPPER『科学的発見の論理』恒星社厚生閣
- 3、同上 『推測と反ばく』法政大学出版局
- 4、同上 『客観的知識』木鐸社
- 5、エイヤー『言語、真理、論理』岩波書店
- 6、イアン・ハッキング『言語はなぜ哲学の問題になるのか』勁草書房
- 7、坂本百大編『現代哲学基本論文集』けい草書房

A、科学の統一プログラム

(1) 言語による科学の統一

*カルナップによれば、科学はつぎのように区別される。

形式科学——論理学

——数学

経験科学——物理学（化学、鉱物学、天文学、地質学、気象学などを含む）

——生物学（広義） ——生物学

——心理学および社会科学

*カルナップは、<物-言語による科学の言語の統一>を意図した。

物-言語 = 前科学的言語と物理言語との共通の部分

——「観察可能な物-述語」：重い、軽い、赤、青、大きい、小さい、

——「傾性述語」：一定の条件のもとでの一定の行動に対する事物の傾性を表現するような用語

：弾性の、溶解性の、柔軟な、透明な、もろい、可塑的な、・・・

・傾性述語は、観察可能な物-述語に還元可能である。46

*物-言語は、最終的には全て「観察可能な物-述語」に還元されるとカルナップは考えた。

*物理言語、生物学言語、心理学的言語もそれぞれ物-言語に還元可能である。

物-言語 = 前科学的言語と物理言語との共通の部分

物理言語 = 論理-数学的用語と物理学用語

生物学的言語 = 論理-数学的用語と物理学用語と生物学的用語 41

*<プログラムの破綻>

論理実証主義のプログラムは、破綻した。その理由は、還元が不可能であったということである。

(1) 物理法則や生物法則などの全称命題の、物-言語への還元が不可能であった。

(2) 傾性語の観察可能な物-述語への還元が不可能であった。

それを次により詳しくみよう。

*<コメント>

科学の統一のプログラムとしては、現在「一般システム論」(ベルタランフィ)によるアプローチがある。しかし、20世紀初頭に見られた、諸科学の分裂や、科学と生活世界との分裂とか、自然科学と人文社会科学との断絶などに対する<危機意識>は、現在はほとんどみられない。現代において、諸科学は、社会への貢献、経済活動への貢献が重視されている。そのことが諸科学ないし、諸科学研究を統合する原理になっているのである。

(このことが、科学研究や社会にどのようなバイアスを与えるのかを、分析する必要があります。)

2、論理実証主義の検証理論 verification theory とその破綻

カルナップ(1891-1954)は言明を3つに分ける。

1、論理的恒真式と恒偽式

論理学と数学

2、事実式の中で経験的に検証可能なもの

科学的言明

3、事実式の中で経験的に検証不可能なもの

形而上学的言明

これは無意味であり、従って真でも偽でもない。

*「完全検証可能性」の定義

「ある命題が検証可能であるとは、その命題が観察命題の集合から論理的に演繹可能であるということである」

*** 「完全検証可能性」という規準の欠点**

欠点1：普遍的言明（例えば「すべてのスワンは白い」）は検証不可能であるから、ほとんどの科学理論は無意味なものになってしまう。

欠点2：「黒いスワンが存在する」は検証可能であるので、有意味である。しかし、その否定の全称文「すべてのスワンは黒くない」は検証不可能であるので、無意味である。つまり、有意味な文の否定が、無意味であることになる。これは、ある文が真または偽であるならば、その否定は偽または真であると言う、基本的な論理的原理に矛盾する。

*** 「部分検証可能性」の定義（エイヤーによる）**

「ある命題が検証可能であるとは、その命題に他のいくつかの前提を結び付けると、それらの前提のみからは演繹されないようないくつかの経験命題が演繹される、ということである。」

*** 「部分検証可能性」という規準の欠点**

欠点1：バーリンの批判

「この論理学の問題は明るい緑色である。

私はあらゆる種類の緑色が嫌いである。

それゆえに、私はこの問題が嫌いである。

私はここで、妥当な三段論法をおこなっている。この大前提は弱い意味での検証可能性の定義にかなっており、また論理学と文法の規則にのっとっている。しかし、この推論はあきらかに無意味である」（イアン・ハッキング『言語はなぜ問題になるのか』けい草書房、160）

この大前提はあきらかに無意味であるが、エイヤーの規準では、これが検証可能で有意味であることになる。